小笠原の固有森林生態系を脅かす外来植物
～モクマオウ編～

小笠原諸島森林生態系保全センター

小笠原諸島には、貴重な野生動植物が生息・生育していますが、過去に移入等された外来種がその分布域を拡大し、小笠原の固有森林生態系に影響を及ぼしています。父島においては特にモクマオウという外来植物がその旺盛な生命力から猛威を振るっています。

モクマオウはモクマオウ科モクマオウ属の常緑高木でオーストラリア、マレーシア、ニューカレドニア、フィジー、マスカレン諸島の東南アジアから太平洋諸島に広く分布しています。外観は針葉樹に似ていますが、広葉樹であり、葉に見えるものは枝で葉は退化しています。一八七九年にインドより輸入され、荒廃地復旧のための造林樹種として、父島、母島などの各島に植栽されました。過去の調査では生長の良い個体では15年目にして直径約20㎝、樹高17～18ｍに達したとの記録が残っており、母島のアカギと同様に小笠原の土地に適応できる「優良」な樹種であることが示されていました。

モクマオウの枝

モクマオウは耐塩性や耐乾性が強く貧栄養立地にも耐えるため、岩角地の窪みや割れ目からも発芽・定着して高木林になります。このため、海岸風衝地や海食崖ではオガサワラアザミ等、岩峰や尾根の岩角地ではコヘラナレン、ウラジロコムラサキ等の希少固有種の生育立地を奪ってしまいます。リター（落葉落枝）は分解が遅く、空間を含んだ層を厚くつくるため、他種の発芽を抑制してしまい、モクマオウの純林が形成されやすくなっています。また、兄島の台地上では小笠原の固有種であるオガサワラハンミョウの幼虫の生息地である裸地が、リターの堆積により喪失しており、オガサワラハンミョウの数を減らす原因となっています。

モクマオウの純林
（地表には落葉が厚く積もっている）

一方、母島列島に生息するオガサワラカワラヒワにとっては、実が餌となり、通直な樹形はノネズミの登攀を防ぐことから、安全に繁殖出来る場を作ってくれる重要な木となっています。そのため、オガサワラカワラヒワの生息地では捕食者であるノネズミの駆除が完了した後にモクマオウの駆除を行う計画としています。

モクマオウの枝に止まるオガサワラカワラヒワ

小笠原諸島森林生態系保全センターではこのモクマオウを伐採や薬剤注入により駆除しています。また、地元の高校生や東京農大の学生ボランティアなどと一緒に行う駆除活動も実施しています。

こうした努力の結果、少しずつですが固有森林生態系が回復してきています。世界自然遺産にも登録されたこの小笠原の素晴らしい自然を後世に残すため、今後も邁進してまいります。

モクマオウ駆除に汗を流すボランティア